

第2章

日本青年韓国派遣

行 動 地 図

行 動 記 録

訪 問 先 一 覧

団 長 報 告

参加青年代表報告

ディスカッション成果



行動地図

令和元年度 日本青年韓国派遣



行動記録

令和元年度 日本青年韓国派遣

	月日	時間	行動日程	滞在都市
1	9月18日 (水)	12:05 14:25 15:35-16:40 16:50-18:05 18:30-19:40 19:50	東京(羽田)発(OZ1075) ソウル(金浦)着 移動(金浦→ホテル) プログラム オリエンテーション 夕食 ホテル着	東京 金浦(キンポ) ソウル
2	9月19日 (木)	11:00-12:00 12:30-13:25 13:50-15:10 15:30-17:00 17:15-18:10 18:30	女性家族部表敬訪問 昼食 大韓民国歴史博物館訪問 在大韓民国日本国大使館公報文化院表敬訪問 ・概要説明 ・質疑応答 夕食 ホテル着	
3	9月20日 (金)	11:20-12:30 12:30-13:30 13:30-15:30 15:30-16:00 16:00-18:00 18:20-21:00 21:20-22:40	<日韓青少年交流会> ・開会式 ・オリエンテーション 昼食 レクリエーション チェックイン 文化交流会リハーサル 文化交流会及び夕食 文化交流会まとめ	
4	9月21日 (土)	9:00-9:30 9:30-12:00 12:00-13:00 13:00-14:50 15:00-15:40 15:40-16:00 16:00-18:00 18:00-18:40 18:45-19:25 20:00	ディスカッション オリエンテーション ディスカッション 第1部 <テーマ:多文化共生> ① 教育 ② 労働 ③ ジェンダー ④ 暮らし ⑤ メディア 昼食 ディスカッション 第2部 ディスカッション成果発表 休憩 共同制作 夕食 閉会式及び送別 ホテル着	
5	9月22日 (日)	9:10-12:00 12:15-13:15 13:40-17:30 18:20-19:20 19:45	移動(ソウル→全州) 昼食 全北大学校日本語研究会(サークル)との交流会 ・学校紹介及び学会紹介 ・アイスブレイク ・ディスカッション:私たちがつくる日韓交流プログラム ・グループごと発表 夕食 歓送及びホテルチェックイン	全州(チョンジュ)

月日	時間	行動日程	滞在都市
6 9月23日 (月)	9:30-14:00 14:00-15:00 15:00-16:45 16:45-18:30 18:30-19:30 20:00	全州青少年文化の家訪問及び交流会 ・挨拶及び相互発表 ・アイスブレイク及び交流 ・昼食 ・チョンサチョロン作り体験 移動(全州→金堤) 国立青少年農生命センター訪問 ・表敬訪問及び質疑応答 ・センター視察 移動(金堤→天安) 夕食 ホテル着	全州(チョンジュ) ↓ 金堤(キムジェ) ↓ 天安(チョナン)
7 9月24日 (火)	10:00-11:40 12:40-13:30 14:00-17:20 17:40-18:45 19:00	外巖(ウェアム)民俗村 ・民俗村の紹介 ・天然素材染色体験 昼食 国立中央青少年修練院訪問 ・表敬訪問及び質疑応答 ・体験型活動 夕食 ホテル着	
8 9月25日 (水)	9:30-10:30 10:30-12:35 13:10-14:10 14:20-15:50 15:20-16:30 16:55-18:30 19:30-20:00 20:00	移動(天安→水原) 華城行宮(ファソンヘンゲン)訪問 ・華城行宮の展示観覧 ・自由観覧 昼食 サムスンイノベーションミュージアム 移動(水原→ソウル) 韓国外国語大学校訪問 ・講義:韓国語と日本語のあいさつ行動 夕食 ホテル着	水原(スウォン) ↓ ソウル
9 9月26日 (木)	11:00-12:00 12:30-13:30 14:00-15:30 15:50-17:00 17:30-18:30 18:40	国立民俗博物館訪問 昼食 戦争記念館訪問 Nソウルタワー訪問 夕食 ホテル着	
10 9月27日 (金)	9:40-11:40 12:00-12:50 13:10-14:00 14:30-15:00 15:00	韓国両性平等教育振興院訪問 ・両性平等に関する講義 ・ポスター作成体験 昼食 文化備蓄基地訪問 ホームステイ歓迎会 ホームステイ開始	
11 9月28日 (土)	終日	ホームステイ	
12 9月29日 (日)	11:00 11:30-12:30 12:30-14:20 14:20-16:30 16:30-18:40 18:40-19:30 19:45	ホームステイ終了 昼食 移動(ソウル→加平) アチムゴヨ樹木園訪問 移動(加平→ソウル) 夕食 ホテル着	加平(カピョン) ↓ ソウル ↓

	月日	時間	行動日程	滞在都市
13	9月30日 (月)	10:00-10:30 11:00-18:00 18:00-19:00 19:00-19:30	ソウル文化探訪オリエンテーション ソウル文化探訪(日韓既参加青年交流会) ・韓服体験 ・昼食 ・ソウル自由ツアー 夕食及び歓送会 ホテル着	ソウル ↓
14	10月1日 (火)	10:00-12:20 12:45-13:40 13:45-15:30 17:20-19:30 19:35	希望製作所 昼食 MBCワールド 歓送晩餐会及び評価会 ホテル着	↓
15	10月2日 (水)	11:40-12:20 12:30-13:00 15:30 17:35	移動(ソウル→金浦) 昼食 ソウル(金浦)発(OZ1045) 東京(羽田)着	金浦(キンポ) ↓ 東京

訪問先一覧

令和元年度 日本青年韓国派遣

9月19日

女性家族部

訪問先都市	ソウル
面会者	チャン・ソクジュン (Chang Seok Jun) 青少年活動振興課/課長 ム・ダジョン (Kim Da Jeong) 青少年活動振興課/行政事務官 青少年活動振興課/研究員
訪問概要	この事業を内閣府と共同で主催する女性家族部を訪問した。女性家族部は、主に女性、青少年、多文化家族を対象とした政策に取り組んでいる行政機関である。チャン・ソクジュン課長から具体的な政策について紹介していただいた後、派遣団からの質問に答えていただいた。その後、日韓両国でプレゼント交換をし、記念撮影を行った。

大韓民国歴史博物館

訪問先都市	ソウル
訪問概要	19世紀末から今日に至るまでの韓国の近現代史に関する資料を多数展示した博物館である。順路に沿って出来事を把握することで、歴史や時代の流れを認識しやすい仕組みになっていた。日本では学べない韓国側の視点から見た歴史を知ることができた。

在大韓民国日本国大使館公報文化院

訪問先都市	ソウル
面会者	宮田起三弘 副院長/一等書記官 安大鉉 (An Dae Hyun) 副調査官
訪問概要	在大韓民国日本国大使館公報文化院は、1971年に開設後、文化行事やシンポジウムの開催、青少年交流事業を通して、日本の文化や芸術、最新情報を発信している機関である。今回の表敬訪問では、大使館の役割や取り組みを説明いただいた。また質疑応答が活発に行われ、国際交流の意義や向き合い方についてのお話は団員の胸を躍らせた。

9月20～21日

日韓青少年交流会

訪問先都市	ソウル
面会者	韓国青少年活動振興院 青少年交流センター部長キ 韓国青少年活動振興院 青少年交流センター担当 令和元年度韓国青年招へい団団長 令和元年度韓国青年招へい団副団長 令和元年度韓国青年招へい団副団長
訪問概要	今年度の日本及び韓国参加青年や韓国側の派遣団OB・OGが集まって交流会を行った。一日目は、日韓両国の青年でグループを作って、ゲームを通して交流を図り、夜は文化交流の夕べで両国の団員がパフォーマンスを披露し合った。二日目は、「多文化共生」を大テーマに5つのグループに分かれて、それぞれのトピックについて両国の青年同士でディスカッションを行った。一泊二日と短い時間ではあったが、寝食を共にして互いの親睦を深めることができた。

9月22日

全北大学校日本語研究会

訪問先都市	全州
訪問概要	全北大学校日本語研究会は、1994年3月に設立されたサークルである。令和元年春学期現在、約60名の学生が所属しており、日本文化を理解するため日本語学習を行っている。訪問当日は、研究会の学生と共に日韓交流のプランを班別で考え、共有しあった。

9月23日

全州青少年文化の家

訪問先都市	全州
訪問概要	全州青少年文化の家は、青少年が身近に利用できる活動施設として1996年に設立され、青少年活動・文化体験・福祉における様々なプログラムが行われている。今回の訪問では、韓国の中学生、高校生達と小グループに分かれ、ゲームを通して交流し、日本文化紹介としてクイズやダンスの披露をした。昼食後、韓国伝統の灯籠「チョンサチョロン」作りを一緒に行い、楽しい時間を過ごした。

国立青少年農生命センター

訪問先都市	金堤
面会者	院長 農生命活動部／部長 活動協力部／部長 活動運営部／部長
訪問概要	生命科学、農業技術、生態環境、農業文化の体験を通して、生態系への関心を育み、総合思考力をもった青少年の育成を目指す施設を訪問した。青少年の未来の農業への認識を高め、多様でクリエイティブな体験活動を通して、健全な緑色市民（環境にやさしい市民）を育成することを目的とした施設である。実際に団員たちも施設の敷地内を歩いたり、土を触ったりしながら、金堤の広大な自然を感じることができた。

9月24日

外巖(ウェアム)民俗村

訪問先都市	牙山
訪問概要	外巖民俗村には、韓国の中部に位置する忠清道地方固有の格式を備えた朝鮮王朝時代の特権身分階級である両班の家柄の故宅や草屋、石垣、庭園が昔の姿そのままに保存されている。また、現在でも住民の方々が伝統を守りながら生活を送っている。ここでは、布を自然由来の染料に浸し、よく揉み込む草木染という伝統的な染色方法を体験した。

国立中央青少年修練院

訪問先都市	天安
面会者	青少年活動振興院活動事業理事／院長
訪問概要	国立中央青少年修練院は、多様でクリエイティブな体験活動を通して、青少年が共に成長できるよう、国が設立した修練施設である。表敬訪問では、施設の概要や、今後の青少年交流のあり方、未来社会の構築についてお話を伺った。その後、韓国式の弓体験と、マクラメと呼ばれる平結びの結び方を習い、小物作りをした。韓国の文化を肌で感じる事ができる貴重な経験となった。

9月25日

華城行宮

訪問先都市	水原
訪問概要	華城行宮は、朝鮮時代第22代の王である正祖が建立したもので、朝鮮行宮の一つである。王が王宮を離れる行幸中の宿泊場所として利用された。正祖は1年に1度水原を訪れ、2000人以上の家来とともに片道2日かけて行幸した。団員たちは、ガイドによる日本語の解説のもと行宮を観覧した。朝鮮時代の王朝の様子を知ることができ、充実した時間を過ごした。

サムスンイノベーションミュージアム

訪問先都市	水原
訪問概要	サムスン電子が作った巨大なデジタルシティ内にあるミュージアムを見学した。こちらの施設では、電子産業やサムスン電子の歴史を知るだけでなく、サムスン電子が誇るイノベーションに実際に触れて体験することができた。そして、サムスン電子の未来へのビジョンを映像で鑑賞し、団員の多くが感動した。

韓国外国語大学校

訪問先都市	ソウル
面会者	日本語教育学博士／日本語大学日本語文化学部教授
訪問概要	韓国と日本のあいさつ行動比較についての講義を受けた。日韓を比較してみると、あいさつの目的や性質が異なることに気づかされた。身近にある言葉や実体験をもとに講義していただいたため、深く理解することができた。知識が相互理解につながることを強く感じた。

9月26日

国立民俗博物館

訪問先都市	ソウル
訪問概要	国立民俗博物館は、韓国人の生活文化を研究・展示・教育・保存する施設である。施設の方から日本語で、丁寧で詳しいガイドをしていただきながら見学した。常設展示では、「韓国人の一日」、「韓国人の日常」、「韓国人の一生」をテーマに、韓国人の衣食住や日常生活全般について理解を深めることができた。

戦争記念館

訪問先都市	ソウル
訪問概要	戦争記念館は、護国追悼室、戦争歴史室、朝鮮戦争室、寄贈室、海外派兵室、韓国軍発展室、大型装備室の7つの屋内展示室と、こども博物館、屋外展示場で構成されている。今回の訪問では、6.25戦争、いわゆる朝鮮戦争についての展示がされている韓国戦争室Ⅱを中心に、説明を受けながら周った。実際の戦車や国旗などが展示されており韓国の視点から見た戦争について理解を深めることができた。

Nソウルタワー

訪問先都市	ソウル
訪問概要	Nソウルタワーは、総合電波塔としてソウルの中心に位置し、美しい景色を一望できるランドマークタワー。展望台から、近代的な建物が織り成す都心の風景や、連なる山々、また漢江の美しい自然を眺めた。その後の自由行動では、写真撮影や買い物、軽食などを各自楽しんだ。

9月27日

韓国両性平等教育振興院

訪問先都市	ソウル
面会者	対外協力本部／国際交流センター／センター長 対外協力本部／国際交流センター／代理
訪問概要	2003年に設立された女性家族部傘下機関である韓国両性平等教育振興院は、両性平等教育及び性に対する認識教育を行う機関である。まず始めに、チョ・ヘリムセンター長にジェンダー平等について講義をしていただいた。韓国内で起きたジェンダーに関わる事件や、大きなムーブメントになっているフェミニズムについて学ぶことができた。それから各自でジェンダーに関するポスターを作成して発表を行った。それぞれが感じるジェンダー問題について知ることができ有意義な訪問となった。

文化備蓄基地

訪問先都市	ソウル
訪問概要	1978年に建設された石油備蓄基地は、2000年12月に施設を閉鎖され、2015年末に幅広い市民の参加を得て、生態文化公園兼複合文化空間として生まれ変わった。施設内は電気がついていなかったり、地熱のエネルギーを利用した冷房装置を使用していたりと、当時の様子を実際に体感することができ、この施設では団員たちと有意義な時間を過ごせた。

9月29日

アチムゴヨ樹木園

訪問先都市	加平
訪問概要	1996年5月に開園し韓国で最も長い歴史を誇る私立樹木園であるアチムゴヨ樹木園を訪問した。広大な敷地に4,500種類以上の植物がある園内を団員それぞれが散策しながらゆっくりした時間を楽しんだ。

9月30日

ソウル文化探訪

訪問先都市	ソウル
訪問概要	三日目に行われた日韓青少年交流会で出会った韓国の既参加青年との再会を果たした。全員で韓国体験を行い、グループごとにVR体験や市場見学、またカフェめぐりやショッピングなど事前に計画していた場所を中心に訪問した。現地青年の案内のもと、楽しくソウル市内を探訪することができた。

10月1日

希望製作所

訪問先都市	ソウル
面会者	イウムセンター／センター長
訪問概要	希望製作所は市民の暮らしにおける様々な問題点の解決を目指す、市民の後援金で運営されている民間研究所である。組織の成り立ちや事業内容のお話を伺った後、施設見学、実際の事業例の紹介をしていただいた。市民の生活をより快適に、そして有意義にする取り組みは大変興味深いものだった。

MBCワールド

訪問先都市	ソウル
訪問概要	韓国の地上波放送の三大ネットワークといわれるMBCの放送テーマパークを訪問した。VR体験やニュース体験、ダンス体験をしたり、人気番組のメインキャストと写真を撮ったり、カラオケをしたりできた。人気の時代劇のコーナーでは記念写真を撮って楽しむ団員がたくさんいた。

団 長 報 告

令和元年度 日本青年韓国派遣

水野 孝美

●はじめに

日本・韓国青年親善交流事業は、昭和59年の日韓両国首脳会談における共同声明の趣旨と、昭和60年の日韓国交正常化20周年を踏まえ、昭和62年度から実施してきている。

両国は隣国同士であり長い歴史を有しているが、現在日韓関係が非常に厳しい状況にあり、自治体間やスポーツ等の交流の中止が相次ぎ、韓国派遣が中止になるのではないかと不安をもつ団員が多かったのも事実である。

菅内閣官房長官が記者会見で「日韓関係は現在、非常に厳しい状況にありますけれども、政府としては両国政府の関係が困難な状況にあっても、両国関係の将来のために、相互理解の基盤となる国民間の交流などはこれからも継続していくべきである」と発言している。

このような環境の下、本派遣団を率いて訪韓してきたところであるが、本事業は日本と韓国両国政府の共同事業として実施され、今回の派遣団で33回目。途中一度も途切れることなく継続されてきている事業であり、両国関係にもたらす存在意義や効果は非常に大きなものがある。

●事前研修等

6月13日に団長・副団長・渉外会議があり、福田内閣府青年国際交流担当室長から団長として正式に任命された。私自身、韓国事業担当として4年目になり、今までは韓国派遣がスムーズに実施されるように派遣団のサポート役であった立場から、団長として派遣団を引率する立場になり、身の引き締まる思いであった。また、青年国際交流事業の経験も豊富な大谷、石原両副団長や諏訪、大木田渉外と初めて全員が揃ったの会議は、これからの団を引率する上で頼もしく、また心強く感じられた。

7月2日から6日までの5日間、国立オリンピック記念青少年総合センターで行われた事前研修において、初めて派遣団の構成するメンバー30名が揃った。団員の構成は女性22名、男性3名（派遣前に自己都合により1名派遣辞退）。年齢、職業、韓国に対する認識や語学力な

どが異なる様々な団員たちであったが、初日で初対面ということで少し堅く感じられたが、係決めなど積極的に行い団の運営を円滑に進める役割が決まっていた。

そして、団の目標設定の場面では、団員全員の意見を尊重して話し合いが進められ、悩み苦しみながら最終的に団のスローガンを「情で広げる笑顔の“わ”」に決定した。韓国特有の「情」を友情、人情、愛情を表す言葉と考え、韓国派遣を通して「情」に触れ合い、参加青年以外にも「わ」を広めていきたいとの団員の気持ちが込められており、「わ」には話（コミュニケーション）、笑（笑顔を生み出す）、和（日本の心）、環（繋がり）など日本青年が大切にしたい意味が込められている。

このスローガンは、日本と韓国という大きな括りではなく、個々とのつながりを重視したいと考える団員の思いが込められており、このスローガンが決まったことにより、韓国派遣に対する日本の青年代表としての責任感や団の結束力が高まったように感じられた。



団のスローガン（団幕）

事前研修ではそのほかに、外務省職員から「最近の日韓関係」、大学教授から「韓国政治と日韓関係」、韓国で行われるディスカッションテーマである「多文化共生」についての基礎講義、演習、留学生とのディスカッションを通じて必要な知識を習得した。この経験を通じて、事前研修の目的である日本青年代表としての心構えや知識を身に付け、団としてのチームビルディングを図り、一体感を高めることができた。

また、事前研修中に駐日韓国大使館韓国文化院を表敬訪問し、大使館職員から韓国の文化講座を受け、意見交換を行う機会を頂き、青年一人ひとりに日本青年代表として韓国に派遣される自覚が湧いてきたように思われた。

●韓国青年招へい

7月23日から8月6日の15日間、韓国青年招へい事業が行われ、内閣府の担当として全行程に同行した。

民間や自治体での交流事業が取り止めになるなど、日韓関係が非常に厳しい中での来日であり、招へい団のシン・サン Chol 団長は常に団員の行動等について気にかけており、大変な気苦労があったと推測された。自分自身、韓国に団長として派遣中の対応について考えさせられると共に、引率者として改めて責任感を感じ、身の引き締まる思いであった。

招へい期間中に「日韓青年親善交流のつどい」があり、副団長、渉外のほか、2名の団員が参加した。団員の多くは参加できなかったが、参加できた団員等にとっては、日本人既参加青年等や招へい青年との様々な交流、共同制作、ディスカッションを通して多くのことを学ぶ機会になったと思う。

私自身、シン団長等や招へい青年との交流は、団長として韓国に訪問することを想像しながら、日本での日程を十分に満喫してもらうことを考えて同行した。特にシン団長とは様々な場面で話す機会が多くあり大変有意義であった。招へい青年は15日間の日程を無事終了し、9月に韓国での再会を誓い韓国に帰国した。

●出発前研修まで

事前研修終了後、出発前研修までの約2か月の期間、団員たちはそれぞれの地元に戻り、各自韓国派遣に向けての自主研修期間となった。団員たちはお互い顔が見えない中、それぞれ担当している係の準備を始めた。それぞれ時間の制約のある中、韓国青年と行うディスカッションテーマの勉強、日本文化紹介の練習など団員同士SNS等で連絡を取りながら準備を重ねてきた。

出発前研修では、久しぶりに派遣団29名が揃い、派遣までの2日間自主研修期間での事前準備状況を全員で確認し、団員たちは韓国派遣に向けて期待と不安がある中、派遣本番に向けて最終確認を行った。

最終確認をしている団員たちを見ていて、しっかり事前準備ができていると感じ、派遣本番でも動ずることなく大丈夫だと安心した。

●韓国派遣

9月18日に羽田空港から韓国（キンポ金浦空港）に向け出発した。私自身2回目の韓国訪問であり、これから15日間の派遣期間への期待と緊張での韓国への入国であった。空港で、15日間同行していただいたコーディネーターさん、通訳さん、イさんが笑顔で我々派遣団を迎えてくれた。特にコーディネーターさんは初対面では

あったが昨年の派遣団の時も担当して下さり、通訳のナさんも昨年招へい青年（通訳）として来日し、旧知の間柄であったこともあり、少し安心したスタートであった。

今回の韓国派遣日程は、韓国政府女性家族部表敬訪問、在大韓民国日本国大使館公報文化院表敬訪問、韓国青年との交流プログラム（日韓青少年交流会等）、青少年政策（青少年活動等）、人文社会科学（多文化政策等）等の施設訪問、伝統文化体験等の韓国文化や社会について理解が深められるような施設訪問が選ばれた15日間の派遣日程であった。団員たちの訪問先で常にメモを取りながら積極的に質問する姿や韓国についてもっと知りたいという姿を見て、私は頼もしく感じた。



大統領官邸「青瓦台」、「景福宮」をバックに記念撮影

しかし、2日目の韓国政府女性家族部表敬訪問中に団員たちが楽しみにしていた韓国と北朝鮮を分断する軍事境界線に近い漣川にある韓半島統一未来センター等への訪問が、派遣直前に確認された致死率の非常に高い家畜伝染病「アフリカ豚コレラ」が同地域での発生が確認され、立入禁止区域になったため、同施設等への訪問が中止となったとの報告があった。また、ソウル市内での施設訪問に変更になったり、派遣前に始興で予定されていたホームステイがソウルの団体「韓国ラボ」がホームステイの受入機関に変更になったため、他の地域を訪問する機会が減り、ソウルでの日程が多くなったのは残念であった。

韓国の地方都市（チョンジュ全州、キンムジェ金堤、チョナン天安、スウォン水原）の3泊4日の訪問や加平も含めるとソウル以外の各地においても、韓国青年との交流や多くの施設訪問、伝統文化体験など、個人旅行では経験できない貴重な経験をさせていただいた。

2日目の二国間の青年国際交流事業を担当している韓国政府女性家族部の表敬訪問では、チャン・ソクジュン

青少年活動振興課長から女性家族部が所管する政策について説明があり、団員たちは韓国訪問での最初の公式行事のため少し緊張していたが、質疑応答では積極的に質問をしていた。会議室の前で今年度の招へい団のシン団長が我々派遣団を出迎えてくださり、韓国での再会は私にとっても大変嬉しい瞬間であった。



女性家族部表敬訪問の様子



韓国青年日本招へい団のシン団長と

また、在大韓民国日本国大使館公報文化院表敬訪問では、宮田起三弘副院長から大使館の様々な役割や取り組みについての説明があり、団員たちから活発な質疑応答が行われた。女性家族部、在大韓民国日本国大使館公報文化院の訪問は団員たちにとっては、個人旅行では訪問することができない場所であったため非常に有意義な時間を過ごし、これからの訪問国活動に対して意識が高まったように感じた。

●日韓青少年交流会

日本で開催された「日韓青年親善交流のつどい」に相当するもので、韓国で開催されるのが「日韓青少年交流

会」であり、両国の青年が寝食を共にしながら交流を通じてお互いを理解し友情を深めることができる重要なプログラムである。韓国側の既参加青年等で構成される運営委員の熱心な準備により、初日の開会式、アイスブレイク、文化交流等に始まり、2日目はディスカッション、共同制作などを行い、1泊2日という短い日程ではあったが大変充実したプログラムであった。

日韓青少年交流会は、団員たちが訪問国日程の中でも最も楽しみにしていたプログラムであり、この交流会に向けてディスカッションの勉強、日本文化紹介の練習などの準備を重ねてきたのは過言ではない。初日の文化交流の夕べでは両国の青年からパフォーマンスの披露があり、団員たちはこれまで準備してきた成果を堂々と披露した。2日目は、「多文化共生」をメインテーマにしたディスカッションを行った。日韓の青年が5グループ（教育、労働、ジェンダー、暮らし、メディア）に分かれて、各テーマに関して意見を出し合い、最後にその結果を各グループから全体に発表をした。

そして、この交流会に参加した韓国青年の多くは、今年招へいで来日した青年と私が担当した3年前から昨年までの招へい青年であったため、韓国での再会は大変嬉しい時間であり、そしてこの事業を継続していく大切さを実感した。



日韓青少年交流会閉会式後の記念撮影

●ホームステイ

団員たちが楽しみにしていたプログラムの一つがホームステイであり、韓国の一般家庭の生活が体験できる貴重な2泊3日のプログラムである。団員たちは歓迎式のあとそれぞれの家庭に分散していった。私自身初めてのホームステイ経験であり、語学力に不安がある中、石原副団長と共にホストファミリーのご家庭に向かった。ご家族はご両親と中学生の男の子2人の家族構成であり、ホストマザーとはスマホの翻訳機能、ホストファザーとは英語での会話を中心であったが、少し緊張していた我々を温かく迎え入れてくださり、初めての韓国の一般家庭での生活を楽しむことができたことに感謝を申し上げ

げたい。特に忘れられない体験は2日目の午前中にホストファミリーの自宅の近くの鞍山（標高295m）の中腹にある一周約7kmの市民の散歩コースをご家族と共に約2時間半歩きながら交流したことである。ホストマザーは毎日散歩することが日課になっている様で、散策コースの展望台からはソウル市内が一望でき、市民の憩いの場になっているとのことであった。

ホームステイが終わり、集合した団員たちとホストファミリーの方々との様子をみて、個人旅行では体験できない貴重な体験をできたのではないかと思うとともに、我々派遣団を温かく受け入れてくださったホストファミリーを始め、関係者の皆様に心より感謝申し上げたい。

●最後に

現在日韓関係が非常に厳しい状況にあるなか、15日間の韓国派遣を終え、無事日本に帰国し、10月4日に修了証を団員全員に授与し、我々派遣団は解団した。

団員たちは訪問先では熱烈的な歓迎を受けるなど、日本の新聞やテレビなどの報道で知る韓国と、実際に訪問して自分の目で見て感じた韓国との違いを知るなどの貴重な経験をさせていただいた。韓国の青年との交流や施設訪問等だけでなく、事前研修から団員同士で準備をする過程や韓国派遣中を含め、充実した約3か月の経験は貴重な財産になったと思う。

団長として事前研修から団員たちの成長をみていたが、個性豊かで大変真面目な団員たちは、日本の青年代表としての自覚を常に持ちながら団体行動しており、個人としても団の一員としても団員たちの成長過程を体感することができたことはうれしい限りであり、常に全力で頑張ってくれた団員たちには感謝の気持ちで一杯である。

団員たちには、個人旅行では経験できない中身の濃い貴重な今回の経験を活かして、これまでの多くの先輩たちによって築かれた日韓の友好の絆をさらに深め、今回韓国で知り合うことのできた韓国の青年との友好な関係を続け、また、同じ時間、同じ空間を共有した団員同士の仲間の絆を大切にしてほしい。そして今後は社会の各分野において、リーダーとして活躍することを期待している。

最後に、この派遣事業を通じて知り合い、共に過ごした派遣団の仲間、韓国で我々派遣団を温かく迎えてくれた韓国の青年、訪問先での関係者の皆さんやホストファミリーの皆さん、そして今回の派遣を支えてくれた日本と韓国の関係者の皆さんに感謝を申し上げ、私の報告とさせていただきます。

参加青年代表報告

令和元年度 日本青年韓国派遣

一期一会の出会い

はじめに

私が日本・韓国青年親善交流事業を知るきっかけとなったのは、大学の先輩がこの事業に参加し、事業についてお話を伺う機会があったためである。昨年、大学で日韓交流プログラムに参加し、韓国文化などの表面的な部分だけでなく、内面的な部分を身近にもっと感じたいと思ったため、この事業に参加してみようと決意した。

派遣での出会い

事業に参加するにあたって、「一期一会の出会いを大切に」という目標を立てていた。事業に参加する青年、自主研修を含め、本事業中に様々な場所や施設を訪れる中で、同じ世代や経歴の方々だけでなく、自身とは異なる世代や経歴の方々との出会いがある。色々な方々との出会いを大切にするとともに、話し合う機会があるため、自分の意見をしっかりと持ち、相手に上手に伝えられるようになりたいと考えていた。

私たち韓国派遣団の目標である、『情で広げる笑顔の“わ”』とあるように、韓国派遣を通して友情・人情・愛情の「情」に触れ合い、参加青年以外にもいろんな人との「わ」を広めていくという意味が込められている。この韓国派遣を通して、「情」に触れ合って「わ」を広めていくことができたと感じる。この「わ」を大切に、これからも交流を増やして広げていきたい。

日韓青少年交流会

この事業で特に印象に残っているのは、日韓青少年交流会である。交流会では、今年度の日本及び韓国参加青年と韓国既参加青年が1泊2日でアイスブレイクや日韓両国の文化紹介、5つのトピックに分かれてディスカッションを行い、短い期間であったが、青年同士で絆を深めることができた。

まず、交流会の会場に到着すると韓国青年が出迎えてくれ、自己紹介を含めアイスブレイクをした。派遣前からとても楽しみにしていた一方、少し緊張していたが、笑顔で温かく迎えてくださり、だんだんと打ち解けていくことができた。

文化交流の夕べでは、事前に準備してきた日本のご

当地クイズやねぷた囃子、恋ダンス、有志ダンスを披露した。団員みんなで踊った「恋ダンス」はアンコールがもらえるほどとても盛り上がり、知っている人が多かったため、韓国青年を含めみんなで踊ることができたのがとても印象的で良い思い出となった。韓国青年はK-POPダンスや歌、テコン舞などの披露があり、日本青年は韓国のダンスや伝統の踊り、また音楽を楽しむことができた。K-POPのカバーダンスは可愛く、かっこよくて印象的だった。

交流会の2日目に行われたディスカッションでは、事前研修でテーマを設定し、自主研修中に各自がテーマに沿って収集した情報をグループで共有した。私のグループは、「在留外国人の暮らし」について両国におけるそれぞれの現状や問題点について挙げ、そこから解決策を考えた。日韓の参加青年でディスカッションすることができるというのは本当に貴重な機会だと思うので、当日のディスカッションをより有意義なものにするために自主研修から準備を進めてきた。みんな積極的に意見を出し合い、熱烈なディスカッションをすることができたため、発表まで無事に終わることができるとグループメンバー全員安心し、更にグループの団結力が深まった気がした。交流会でのディスカッションが日韓両国の未来の架け橋となり、ここでの縁がこれからも続いていくことができたらいいと考える。

私は日本紹介係をした。この日の文化交流会のため、事前研修から係のメンバーと何を披露しどう進めるかなど話し合いを重ね、一生懸命準備してきた。自主研修から練習してきた踊りなどを出発前研修で不安な部分をみんな確認しあったり、何度も通して踊りを練習して仕上げ、リハーサルも行った。恋ダンスのアンコールでも盛り上がり、文化紹介を無事披露できて、ホッとした。そして、達成感を味わうことができた。

もし相手の国の言語が話せなかったとしても、音楽は言葉の壁を越えてみんなの心が一つとなり通じ合うことができる一つの手段であると感じた。また、行動するとき、受け身の姿勢で待つのではなく、何事にも挑戦し積極的に行動することが大切だということを学んだ。挑戦するかしないか迷っている場合、結果はどうであれ、挑戦してみることで得るものの方が大きいとこの派遣を通

して感じた。



文化交流会で日本文化紹介として「恋ダンス」を披露する



外巖民俗村での草木染め体験

韓国への理解

現在、日韓関係が良くないため、正直韓国に行くことに不安な部分もあったが、派遣中に訪問した外巖民俗村^{ウエアム}など様々な場所で、現地の方々から「どこから来たの?」と尋ねられ、「日本から来ました」と答えると、「日韓関係は悪いけど私たち民間は大丈夫だよ!」と声をかけていただいたことが、すごく印象的で嬉しかったと共に韓国に来てよかったと思うことができた。日韓関係の悪化に伴って、日韓交流が相次いで中止になっているとニュースで報じられていた。しかし、政府間の関係が悪くても民間での交流を続けていくことで、勘違いや偏見が解けたり、日韓の次世代への架け橋になる利点がたくさんあると感じた。

また、韓国派遣中に大韓民国歴史博物館や国立民俗博物館^{ウエアム}、外巖民俗村、サムスンイノベーションミュージアムなどを訪れた。今まで、学校の授業では日本から見た韓国の歴史を習ってきたが、韓国から見た韓国の歴史、日本との関わりについて学ぶことができたのはとても貴重な機会だった。大韓民国歴史博物館では、19世紀末から現在に至るまでの近現代史に関する韓国の歴史について展示してあった。現地のガイドさんによる解説を聞きながら、どのような歴史をたどってきたのかを韓国の視点から学ぶことができた。国立民俗博物館^{ウエアム}と外巖民俗村では、韓国の伝統文化について学んだ。国立民俗博物館は韓国の生活文化について、「韓国人の一日・日常・一生」という面で展示してあり、韓国の衣食住などの理解を深めることができた。外巖民俗村は朝鮮時代の貴族階級であった両班の家柄の家屋が立ち並び、石垣や庭園を昔の姿のままで見ることができた。そこでは伝統の草木染め体験することができた。

サムスンイノベーションミュージアムは韓国最大の電子産業やサムスン電子の歴史が展示され、サムスン電子

のイノベーションに実際に触れることのできる施設である。発明電球や家電製品、電子機器に至るまで消費者に多くの製品が提供されてきた。サムスンの技術と展示物に終始圧倒され続けて、驚きと感銘の連続だった。多くの人の努力と開発があったからこそ、電子産業の発展があり、今の韓国最大の企業のサムスンがあると感じた。

たくさんの施設に訪問し、たくさんの現地の方々に触れ合うことができ、肌で感じて学ぶことが大変多かった。韓国派遣に行く前と比較すると韓国への理解が深まり、また多角的に物事を見て自国を見つめ直すことができたと感じる。

最後に

この事業で得たものは数えきれないくらい多く、貴重な経験をすることができた。様々な経験を通して、この事業に参加する前と比べて自分自身成長できていると嬉しい。

そしてなにより、この事業を通して団員の仲間に出会えたことが私にとって大切な宝物となった。7月の事前研修で全員が揃い、緊張とワクワクする気持ちで初めての顔合わせとなった。日本全国各地から集まり、学生や社会人の方などいろんな経験をしてきた方に出会うことができ、とても新鮮で私自身にとってとても刺激的だった。この派遣中に、団員のみんなと話していくなかで、いろんな考え方の人がいて、いろんな経験をしてきた人がいて、それらを聞いて吸収し、意見交換ができたことがとても意味のあるものとなった。

事前研修から韓国派遣を通して、学んで得たことをIYEOでの事後活動に積極的に参加し、私たちの周りの人にこの活動を伝え、広めていきたい。

この15日間で体験したことは一生忘れることの出来ない経験となった。これからも感謝を忘れず、日韓のよ

り良い関係と未来のためにまた違う形で貢献していきたい。



金浦空港で現地のコーディネーターさんと通訳さんを含め
集合写真を撮影した

韓国派遣で得たもの

本事業に対する思い

職場からの推薦により応募し、試験に合格したことで本事業に参加することとなった。もちろん推薦があったからという理由だけでなく、これまで韓国語の勉強を通じて韓国に興味を持っていたこと、韓国の文化を直接感じたいと思ったこと、日韓問わず新たな人脈を作りたいと思ったことなど、いくつかの理由を以って応募することを決めた。

韓国派遣に先立ち事前研修が行われ、日本青年と初めて顔を合わせた。係やスローガンを決めることとなり、係はすぐに決まったが、スローガンはなかなか決まらなかった。そこで、それぞれの本事業に対する思いをポストイットに書き出し、何度も意見を交わした結果、ようやく決まったスローガンは、「情で広げる笑顔の“わ”」だ。このスローガンは「派遣を通じて、韓国特有の情に触れ、“わ”を広げていく」という意味で、情には「友情、人情、愛情」、「わ」には「話、笑、和、輪」という意味が込められている。

スローガン決めを含め、事前研修中は様々な壁にぶつかった。しかし、団員全員が自分の意見を主張しながらも、相手の意見を尊重することで乗り越えることができ、派遣に向けて最高のスタートを切ることができた。

事前研修最後の夜、団員一人ひとりの思いを聞く機会があり、皆派遣に対する強い意志と目的を持って参加していることを知った。中でも「参加したくても出来なかった人がいるということをお忘れず、国の代表という責任を持って派遣に臨みたい。」という言葉が聞いたとき、みんなと同程度の強い意志と目的があるかと問われたら正直自信がなかった私は、せめて派遣後に得た経験と知識を社会に還元できるよう責任を持って派遣に取り組もうと決意した。

事前研修が終わり、約2か月の自主研修期間を経て、いよいよ派遣が始まった。日韓関係が史上最悪と言われるほど悪化しており、様々な交流事業が中止となるなか、本事業は中止とならず遂行されることとなった。韓国人の日本人に対する暴行事件やデモの様子等が度々報道され、周囲の人からも今韓国に行って大丈夫かと心配されるほどであったが、そんな心配は必要なかった。どこへ行っても温かい対応で、むしろ日本人が好きだと歓迎してくれた。特に記憶に残っているのが、初日の夕食

後の出来事である。すれ違った見知らぬ男性が、日韓の国旗がプリントされた団ポロシャツを見て、笑顔で声を掛けてくれた。交わした言葉はほんの少しであったが、その友好的な態度を見て、報道されていることが全てではなく、やはり自分の目で見て知る必要があると改めて感じた。

印象に残ったプログラム

派遣プログラムは、女性家族部、韓国両性平等教育振興院等の訪問、大韓民国歴史博物館やサムスンインノベーションミュージアム等の見学、韓国伝統の灯籠作りや、草木染等の体験、日韓青少年交流会、全北大学校日本語研究会等での韓国青年との交流、そしてホームステイ等盛りだくさんの内容が組み込まれていた。どのプログラムも大変充実しており、多くの経験や知識を得ることが出来た。中でも印象に残ったプログラムを紹介したいと思う。

一つ目は、日韓青少年交流会と全北大学校日本語研究会での韓国青年達との交流である。

日韓青少年交流会は、今年度日本に招へいされた韓国青年及び既参加青年達と一泊二日の日程で交流を深めるプログラムで、様々な個性を持っている日韓の青少年が交流し、ハーモニーを奏するという意味を込めて「レインボー」というテーマが掲げられていた。当初の目的の一つであった人脈を広げるチャンスだと思い、期待に胸が膨らんだ。初めにいくつかのグループが作られ、プログラムが始まるまでの間、ちょっとしたフリートークをしたのだが、お互い日本語または韓国語を勉強していたにもかかわらず、いざ話すとなると言葉が出てこず、少し気まずい雰囲気となってしまった。しかし、その後行われたグループ対抗のレクリエーションでは力を合わせることで2位となることができ、最後にはこぶしを突き合わせる程仲良くなることができた。お互いが拙い日本語や韓国語で何とか言葉を伝えようと努力することで通じ合うことができ、本交流会のテーマである「レインボー」を達成できた気がした。言葉の壁はあっても、お互いが相手に関心を持って接すれば通じ合えるということを実感できた。本交流会で深めた交流関係を派遣後も続けていきたい。

全北大学校日本語研究会は、日本文化を理解するため、日本語学習を行っているサークルで、研究会の韓国